



## 対訳で楽しむ 『女の一生』<sup>3</sup>

永田千奈

女の一生キャラ図鑑、今回は、ジャンヌの夫、「イケメンだけどサイテー男子」、ジュリアン・ド・ラマール子爵を取り上げる。まずは、その出会いから。

修道院を出て、ノルマンディーで暮らし始めたジャンヌは、間もなく地元の司祭から、ジュリアン・ド・ラマール子爵を紹介される。会ってみると、これがなかなかの美男子なのである。

Le vicomte s'inclina, dit son désir, ancien déjà, de faire la connaissance de ces dames, et se mit à causer avec aisance, en homme comme il faut, ayant vécu. Il possédait une de ces figures heureuses dont rêvent les femmes et qui sont désagréables à tous les hommes. Ses cheveux, noirs et frisés, ombrèrent son front lisse et bruni ; et deux grands sourcils, réguliers comme s'ils eussent été artificiels, rendaient profonds et tendres ses yeux sombres dont le blanc semblait un peu teinté de bleu.

Ses cils, serrés et longs, prêtaient à son regard cette éloquence passionnée qui trouble, dans les salons, la belle dame hautaine, et fait se retourner la fille en bonnet qui porte un panier par les rues<sup>1)</sup>.

Le charme langoureux de cet œil faisait croire<sup>2)</sup> à la profondeur de la pensée et donnait de l'importance aux moindres paroles.

La barbe drue, luisante et fine, cachait une mâchoire un peu trop forte.

**訳** 子爵はお辞儀をし、かねてよりお目にかかりたいと思っていました、と告げた。そして、いかにも経験をつんだ、きちんとした紳士らしく、落ち着いた様子で話し始めた。女性たちにちやほやされ、同性に疎まれるような美しい顔立ちというものが存在する。彼はまさにそんな顔をしていた。日に焼けた艶やかな額に、黒く縮れた髪が影をつくっている。つけ眉ではないかと思うほど整った眉によって、黒い瞳は、ま

すます深く、優しげな風情を湛え、白目は青みがかって見えるのだ。

濃く長いまつ毛は、彼のまなざしを熱っぽく雄弁なものにしていた。彼がサロンに顔を出せば貴婦人達が心をときめかせ、道を歩けば、籠を抱えた帽子の少女がふり返る。

物憂げな魅力に満ちたそのまなざしによって、ひとは、彼を思慮深い人間だと思い、ちょっとした言葉にも深い意味がこめられているかのように感じてしまうのだ。ややもするとごつい印象を与える顎は、繊細で光沢のある濃い髭に隠れている。

**注** 1) 貴婦人と若い町娘を対照させることで、あらゆる女性が彼に夢中になることを示している。2) faire croire、直訳すると「～と信じさせる、思いこませる」。つまりは、内実が伴わない表面的な美であることをほのめかしている。

文句なしのイケメンである。修道院育ちで、男性に免疫のないジャンヌはすぐのほせあがってしまう。やがて、ジュリアンに求婚されたジャンヌは、深く考えることなく、結婚を承諾する。だが、新婚旅行の最中、ジャンヌは美貌の下に隠れた夫の素顔を発見する。夫は「釣った魚にエサはやらない」といわんばかりにお金をケチりはじめたのだ。

Sans cesse, il discutait avec les maîtres et les garçons d'hôtel, avec les voituriers, avec les vendeurs de n'importe quoi, et quand il avait, à force d'arguties, obtenu un rabais quelconque, il disait à Jeanne, en se frottant les mains :

— Je n'aime pas être volé<sup>3)</sup>.

Elle tremblait en voyant venir les notes, sûre d'avance des observations qu'il allait faire sur chaque article, humiliée par ces marchandages, rougissant jusqu'aux cheveux sous le regard méprisant des domestiques qui suivaient son mari de l'œil en gardant au fond de la main son insuffisant pourboire<sup>4)</sup>.

**訳** ジュリアンは常に交渉しようとする。旅館の主人、給仕を相手にやりあい、馬車の運賃や商品の代金を値切ろうとする。さんざん粘って買い叩くことができると、手をすりあわせながら、ジャンヌにこういうのだ。「ほられるのは嫌なんでね」

ジャンヌは勘定書がくるたびに震え上がった。きっと、またジュリアンがひとつひとつ細かいことをあげつらいつつ、文句を言うに決まっているからだ。ジャンヌは、ジュリアンの値切り交渉に、髪の前まで赤くなりそうなほど恥じ入っていた。チップを渡された人たちが、どうみても相場以下のチップを手握り締め、夫の背を恨めしげな目で見送っていることにジャンヌは気づいていたのだ。

**注** 3) être volé = 騙される、ごまかされる 4) sous le regard 以下は、ジャンヌが赤面した理由と考え、別文に独立させて訳出。

吝嗇と堅実は紙一重。金銭感覚の疎いジャンヌのほうにも非があるようにも思えるが、何しろお嬢さん育ちなのだ。春に出会って、夏には結婚。その後、秋風が吹き始め、二人の関係は冷めていく。このあたり、季節の移り変わり二人の関係の変化が見事なまでにシンクロしている。やがて、冬。結婚してまだ一年もたたないのに、まるで倦怠期の夫婦のような二人の様子を覗いてみよう。

Elle avait pris son parti de ces changements d'une façon qui l'étonnait elle-même. Il était devenu un étranger pour elle, un étranger dont l'âme et le cœur lui restaient fermés. Elle y songeait souvent, se demandant d'où venait qu'après s'être rencontrés ainsi, aimés, épousés dans un élan de tendresse, ils se retrouvaient tout à coup presque aussi inconnus l'un à l'autre que s'ils n'avaient pas dormi côte à côte.

Et comment ne souffrait-elle pas davantage de son abandon ? Était-ce ainsi, la vie ? S'étaient-ils trompés ? N'y avait-il plus rien pour elle dans l'avenir<sup>5)</sup> ?

Si Julien était demeuré beau, soigné, élégant, séduisant, peut-être eût-elle beaucoup souffert<sup>6)</sup> ?

**訳** ジャンヌは、ジュリアンのそんな変化を自分でも驚くような態度で受け止めていた。ジュリアンは彼女にとってすっかり他人になってしまった。彼が何を考え、何を思っているのか、彼女にはまったくわからない。ジャンヌは、幾度となく、ふたりの関係について考えてみた。いったいつからこうなってしまったのだろう。あれほどまでにやさしい気持ちで、出会い、愛し合い、結婚したというのに、今やふと気づくとお互い他人ようになってしまい、まるで、いちども床をともにしたことがないかのようだ。

夫に見捨てられたのに、それほど辛いと思わないのはどうしてだろう。人生なんてこんなものなのだろうか。あの結婚は間違いだったのだろうか。もうこの先、自分の人生には何も残っていないのだろうか。

もし、ジュリアンが美男子のまま、身だしなみに気をつけ、エレガントで魅力的だったら、二人の関係が冷めたことをもっと嘆いたのだろうか。

**注** 5) 自由間接話法。ジャンヌの独白として捉える。6) 反実仮想。現実には、ジュリアンは美貌を失い、ジャンヌは夫の心離れを平然と受け止めている。

ケチのくせに見栄っ張り、使用人に暴力をふるうなど、ジュリアンはジャンヌを幻滅させる。現代なら、「もう別れちゃいなさいよ！」とけしかけたくなるダメ男ぶりである。さらに、ジュリアンは、女中のロザリにまで手をだし、彼女を妊娠させてしまう。ロザリに持参金をつけ、村の男と結婚させることで事態を收拾させたものの、ジャンヌはもうジュリアンを信じるができなくなってしまった。ここに至って、さすがのジャンヌも「もう別れる！」と宣言。だが、自分もロザリ同様、おなかにジュリアンの子を宿していることに気づき、結局、離婚を諦めてしまうのである。

だが、ジュリアンの女好きはいつまでたっても治らない。数年後、ジュリアンは性懲りもなく、伯爵夫人ジルベルト・フルヴィルと不倫関係を結ぶ。ジャンヌはもう諦め気味で、見て見ぬふりを通そうとした。しかし、妻を寝取られたフルヴィル伯爵は黙っていない。激しい嫉妬にかられた伯爵は、二人の関係を終わらせようとする。かくして、伯爵夫人とジュリアンは密会中に殺されてしまうのだ。哀れな色男の末路である。

だが、夫と死に別れたあともジャンヌの人生は続く。幼い息子だけを生き甲斐に、今まで通りの生活を淡々と続けていくのだ。今回は、そんな彼女の未亡人生活とそれを支えた人物たちを見ていこう。

#### ジュリアンとジョルジュ、色男の野心

『女の一生』 *Une vie* 刊行後、モーパッサンはパリを舞台とする2作目の長編小説『ベラミ』 *Bel-Ami* を執筆する。文字通り、美しく恋多き男、ジョルジュ・デュロワが主人公。その人物像は、ジュリアンと重なる部分が少なくない。まずは、美男で女にもて、自身も女好きである点。もう一つは強い上昇志向だ。子爵に生まれ、資産家の男爵の娘ジャンヌと結婚し、伯爵夫人と不倫に陥るジュリアンは、フランス革命後でありながら、階級社会の消えない、当時の社会を映している（ちなみに階級は、低いほうから男爵 *baron* → 子爵 *vicomte* → 伯爵 *comte* → 侯爵 *marquis* → 公爵 *duc*）。いっぽう、『ベラミ』の主人公、ジョルジュは軍隊あがりの失業者から新聞社に職を得て、女たちを足掛かりに出世していく。もっとも、早々に死を迎えるジュリアンに比べ、ジョルジュは強運の持ち主。あらゆるものを手に入れていくのだ。

ところで、この『ベラミ』、つい最近もアメリカで映画化された。色男の主人公に『トワイライト』のロバート・パティンソン。相手役には、ユマ・サーマン、クリスティーナ・リッチ、クリスティン・スコット・トーマスとタイプの異なる美女が名を連ねている（2012年アメリカで公開予定、日本での公開は未定）。

※ 原文は *Une vie*, Le Livre de Poche 版から引用。

※ 訳文は拙訳『女の一生』（光文社古典新訳文庫）を使用。

（ながた・ちな）